

メールレター(50)

クロエとばあーば

雪が降ったり止んだり、春はまだ遠そうです。マダム田中がクロエにであったのは2月26日のことでした。マダム田中の娘の陣痛は長〜かったのです。夜空の満月はこんなに美しいのに、どうしてこんなにお腹が痛むのか、娘はひたすら痛さに耐え、マダム田中はどうしてこんなに気が気でないのか、満月を恨むばかりでした。娘は、16時間の自宅待機の陣痛の末、ドリトル先生の「すぐいけー」の一声に押されて病院に向かい、入院し、更に16時間の激しい産みの苦しみの後、やっとクロエを腕の中に抱きました。妊娠期間は何もかもかも順調で、体格もしっかりした、スポーツウーマンの娘の出産が難産になるとは、誰一人、予想もしていなかったのです。よく頑張りました。娘が、陣痛の間隔がせばまってきていると病院に電話をする度に、「まだまだよ。もう少し待ちなさい。」と言われ、耐えていたようです。

「あまり苦しんでいるようには電話では聞こえてこなかったから、待ってられるかなあと思っています。」

とは、電話を取った担当看護婦の、後の言い訳。この国は、我慢する子は損をするようです。麻酔を打ってもらい少し楽になったとメッセージは入りましたが、それからが長ったのです。子供の位置がかわってしまっていたり、熱がでたり、陣痛が止まってしまったり、クロエの心拍がなくなったり、医者や麻酔医や看護婦が忙しく娘の手当てに走り回っていました。

「こんにちわ、ばあーばよ。」

「こんにちわ、じーじだよ。」

マダム田中とドリトル先生は、孫のクロエとはリモート面会です。髪は栗色、少しカールしています。目はグレーです。鼻が高く、完全に外人の顔です。目をうっすら開けましたが、目も大きい。一体どんな子になるのでしょうか。ばあーばはどう付き合っていたら良いものやら。

病室には産婦とその夫が新生児と滞在できるよう、トイレ、シャワー付きの部屋が用意され、三食運ばれてきます。ホテル並みです。折しもコロナ禍、部屋から一步も出られませんが、快適に過ごせるよう整えられています。育て方の基本的な指導も病院で夫婦で受けます。しかも、出産や入院はただです。安心して出産や育児ができるようになっていきます。ケベック州の出産援助対策が伺われます。晴れ上がり、暖かい小春日和に突然なった日曜日に、ひとり家族が増え、3人で帰宅したと娘からビデオが送られてきました。母親業のスタートです。そのうち会えれば良いなあ、とドリトル先生と深いため息をついております。

娘は、子育てはフランス語です。娘の夫は英語系ですし、兄弟や、甥、姪もバイリンガルですので、育てるのは英語でという選択もあったようですが、迷わず、母語は一つの方が良いと決めたようです。マダム田中は、娘にはどんな場合も日本語以外は使わなかったため、日本語が娘の母語となりました。マダム田中は、ただ単に、エゴイストに、「頭がズキズキする」とか「お腹がしくしく痛む」とか言ったフランス語にならない表現を分かってくれる娘が

欲しいと思っただけなのですが、娘はもっと環境や将来への哲学的な考え方で決めたようです。ドリトル先生は、思い切りフランス語が話せる子が育ちそうだと大喜びです。

そんな愛娘の母親姿を目を細めて眺めるドリトル先生ですが、コロナ禍が続くなか、茶道、裏千家モンテリオール支部の会長になりました。ある日、長年お茶を教えている友人からマダム田中に電話がきました。

「和子さん、誰か裏千家、モンテリオール支部の会長になってくれる人知らない？現会長も高齢。90歳を超えて、記憶も定かでなくなっているから、会長に新しい人を探しているんだけど、いないのよ、どうしても、誰も。」

「難しいよね、日本文化の理解者で協力してくれる人は。貴女がなれば？」

「だめなのよ、お茶をこちらに推進させるという意向なので、こちらの人と決まっているから。お茶はできなくても良いのよ。」

「細かい条件は？」

色々と二人で名前を挙げ、吟味してみますが、難しいのです。お茶は伝統芸であり、両国間の外交術も望まれます。

「たった一人知ってるけど。日本人好みのマナーと顔立ち。日本人好みの肩書き、ドクターのタイトルと叙勲の功績がある人。」

「誰？」

「ドリトル先生。」

一瞬沈黙が続きます。

「でも、引き受けてくれるかしら？」

「条件は一つ。実務、雑務はしないこと。飾りだけ。剣道連盟の雑務で振り回されているので、他のことは無理だと思う。イベントのスピーチ、レセプションの出席はきちんとできると思うよ。」

「わー！理想的。実務は私が全部しているから、それだけしてくれれば充分なのよ。イケメンの会長、良いなあ。聞いてみってくれる？」

「と、かくかくしかじか、友人が、貴方に会長を依頼したいのだそうだけど、どうかしら？」

と、マダム田中はドリトル先生に恐る恐る、お伺いをたててみました。

一瞬の沈黙。

「支部の構成内容と会則を送ってくれるように言って。日本文化の保護に役立つのは嬉しいけれど、ただ知り合いだからというわけにはいかないから。それから考えてみる。」

とても理論的な答えが返ってきました。送られてきた書類に目を通して待つこと1週間。

「会則によると会長の仕事はかなりあるようだね。」

「それはしなくても良いそうよ。ニコッと笑ってスピーチ。にこっと笑って接待のお付き合いだけということだけ。」

「それだけなら、良いだろう。引き受けることにするよ。そのかわり、みんなにしっかりお稽古に励んでもらいたい。」

家元から会長の任命書が届いたのは2月の末のことでした。

